

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	山口 尚
論文題目	物理主義とクオリア ジャクソンの知識論証に対するひとつの応答		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、所謂「知識論証(knowledge argument)」の考察を通して、クオリアをめぐる諸問題の解決を試みるものである。知識論証とは、「物理主義」(科学的に説明しえないものなど、世界には何一つとして存在しないと考える立場)を論駁すべく、豪州の哲学者、F. ジャクソンが一九八二年に案出した次のような思考実験の謂である。白黒の二色のものしか存在しない部屋に生まれた時から閉じ込められているメアリーが、自然科学に通暁し、人間の色視覚に関する物理的情報を全て得たとする。だがたとえこのように完全なる物理的情報を有していたとしても、メアリーは色について未だ重要なことを知らぬままである。何故なら初めて部屋から出てバラを見る時、彼女は「赤色の見え方」を新たに知るであろうからである。よって世界に関する知識は、その全てが物理的情報に帰するわけではない。かくてジャクソンは、物理主義は偽であると結論するに至る。これに対して申請者は物理主義の立場に与しつつ、知識論証に対する再反論を企図する。</p> <p>本論文は二部から構成される。第一部「知識論証の歴史」においては、知識論証をめぐる様々な論争の史的展開を能う限り周到に概観し、百家争鳴とも言うべき諸説の中、特に重要な所論を明快に再構成した上で、それぞれの眼目を剔抉する作業に従事する。ついで第二部「知識論証への応答」では、物理主義における或る一つの立場——これを「タイプA物理主義」と呼ぶことにする——に立脚しつつ、知識論証に対する批判を試みる。</p> <p>各部の詳細は以下の通りである。まず第一部は二節から成る。第一節では知識論証の内実を説明し、これが「科学的な知識をいくら積み重ねても、明らかにされえぬままに留まる側面が世界には存在する」という所謂「知識直感」に基づく議論であることが指摘される。続く第二節は、知識論証をめぐる論争史を三つの時期に区分し、各時期を代表する論者の議論を紹介する。そしてその上で、こうした諸家の見解を「能力反論」、「旧事実／新様式戦略」、「新事実戦略」等に分類することを試みる。</p> <p>ついで第二部は七節に分かたれる。前半(第三節から第五節まで)においては「批判的」考察——すなわち申請者が与しない諸見解を反駁する作業——を行う。まず第三節では、知識論証が暗々裡に(非物理的な心的作用が或る一定の物理的な状態を引き起こすことを認める)二元論に立脚しており、そ</p>			

れ故大いに疑問視されて然るべき議論であることを指摘する。次に第四節においては、知識論証に対する有力な反論として近年脚光を浴びている「新事実戦略」が、実のところ多くの問題を孕むものである所以が示される。そして第五節においては「現象概念」の再吟味を通して（知識論証に対する最も標準的な反論と目される）「旧事実／新様式戦略」の難点が詳らかにされる。

続いて後半（第六節から第八節まで）は、「構築的」な作業——つまり申請者自身の見解の正当化——に充てられる。初めに第六節においては、第三節の成果を基に、知識論証の誤謬がいかなる点に存しているかということをも更に精査し、D. デネットの議論を援用しつつ、この論証が論点先取の弊に陥っている所以を縷説する。次に第七節では、ルイス・ネミロウ流の「能力分析」理論を擁護し、同時にまたメアリーの「新しい」知識の内実を闡明せんとする。「能力分析」に従えば、メアリーは解放後に「事実知」ではなく「方法知」を得たことになる。すると——この「方法知」とは元来、世界のあり方に関する情報と何ら関わりなきものである故——物理学的に全知であるメアリーが仮に新たな「方法知」を得たとしても、このことから直ちに「世界に非物理的側面が存在する」という主張が帰結しないことになる。そして以上の議論を承けて、更に第八節では、近年のジャクソンの見解に依拠しながら「クオリア」概念の物理主義的説明が試みられる（彼は一九九〇年代後半に当初の二元論的な立場を放棄し、物理主義に転じた）。申請者によれば、知識論証と「クオリア」概念を否認する現在のジャクソンの見解（所謂「表象主義」）は蓋し概ね至当である。そこで申請者は本節において、このジャクソンの所説に適当な修正を加えつつ、心的状態が物理的現象に還元される旨を説く「タイプA物理主義」が知識論証によっては決して棄却されえぬ所以を示し、この立場の最終的な正当化を図らんとする。

最後に結語（第九節）では、この「タイプA物理主義」は一般的には容認され難いきらいがあるものの、この難点は見かけ上のものであり、決して致命的な欠陥ではない点を指摘する。何となれば「直感的な受け入れ難さ」と「実際に誤りであること」は区別されて然るべきである為である。それ故、よしんば「タイプA物理主義」が直ちには認め難いものと感ぜられるにせよ、これを支持する十分な証拠が認められるのであれば、我々は満を持してこの立場に与しうるし、また与すべきなのである。

(論文審査の結果の要旨)

周知の通り、この数十年来、脳科学を始めとする認知諸科学の研究が日進月歩の発展を遂げるにつれて、哲学の分野でも英語圏を中心として、意識と脳(別言すれば、心的なものと物理的なもの)との関係を自然科学の諸知見に鑑みつつ解明せんとする試みが多くの研究者の関心を集めるようになった。こうした「心の哲学」において、一九八〇年代以降今日に至るまで、活発にして実り豊かな論争を絶えず喚起し続けているテーマの一つが、物理的現象に還元されえない「クオリア」の有無を争点とする「知識論証」(およびその論拠をなす「白黒部屋のメアリー」なる思考実験)をめぐる問題である。本論文は、この「知識論証」に関する(管見の及ぶ限り)本邦初の本格的な論攷であり、今後当該問題の研究の更なる進展に寄与することも大いに期待される力作である。本論文が評価に値する所以は、具体的には以下の通りである。

第一に申請者は、最新の研究の動向にも綿密な注意を払いつつ、百数十篇にも及ぶ「知識論証」に関する先行研究を周到に検討し、その極めて広汎な精査の成果を簡にして要を得た研究史として纏め上げることに成功している(本論文「第一節」及び「第二節」を参照)。こうした(少なくとも我が国においては)未曾有のサーヴェイ研究により、「知識論証」をめぐる従来の議論は一体何をどこまで明らかにしえたのか、またそこにはいかなる課題が果たされるべくして未だ果たされぬままに留まっているのかといった諸点が初めて炳然となった。この点のみを以てしても、本研究は今日の「知識論証」の研究に少なからぬ貢献を果たしうるように思われる。

第二に指摘すべきは、如上の「知識論証」を以て「物理主義」(すなわち「世界のあらゆる現象は須く科学的に解明されうべきである」と主張する立場)を謬見として斥けようとする見解(具体的には、D. チャルマーズの「ゾンビ論証」や物理主義へ転向する以前のF. ジャクソンの所論)に対する申請者の弁駁の姿勢である。

心的なものと物理的なものを峻別する「二元論」を標榜するこうした反「物理主義」的な主張に対して、申請者は二元論の様々な立場(随伴現象説や相互作用二元論)の詳細な検討を通して、その内的矛盾を的確に指摘している(本論文「第三節」を参照)。

とはいえ、このように「知識論証」に抗して「物理主義」を擁護せんとする態度だけを取り上げるのであるならば、申請者は、反「知識論証」陣営に与する大半の諸家と概ね変わるところがないと言ってもよからう。しかしながら共に等しく「物理主義」に依拠するとはいえ、これら多数派の研究者と申請者の姿勢を分かちつのは、前者が「タイプB物理主義」—すなわち上述の思考実験において「モノクロームの世界を脱して赤い林檎を初めて目撃した際、メアリーは旧知の事実(赤色に関する神経生理学上の知識)を今や新しい仕方において(つまり「赤さ」の現象概念として)知るに至った」という見方を採る立場—に与するのに対して、後者は「タイプA物理主義」に立脚し、今述べた「タイプB物理主義」が孕む問題点を剔抉しつつ、その議論の不徹底性を説得的な論拠を以て示している点である(本論文「第五節」並びに「第六節」を参照)。換言するならば、本論文における申請者の姿勢の独自性は、「物理主義」において目下主流をなす英米の哲学界の議論に追随するのでは

なくして、これを批判的に吟味した上で、少数派である「オーストラリア唯物論」を以て自らの旗幟を鮮明にし、この立場の隠された真価を詳らかにせんとする点にあるのである。昨今、長らく英米両国の哲学者達が牽引してきた分析哲学においても、従来は殆ど顧みられることがなかったと言ってよい「分析形而上学」や「非古典的論理学」等が次第に脚光を浴びるようになってきたことに伴い、如上の分野の研究を主導してきた豪州の諸家の議論が注目を集めつつある。こうした海外の研究動向を踏まえるならば、上述のような特色を有する本論文は、我が国の哲学界に現代オーストラリアの哲学を本格的な仕方で逸早く導入し、その重要な意義を顕彰することを試みている点に鑑みても、進取の精神に富んだ秀作であると言えよう。

しかしながら第三に刮目に値するのは、本論文は決して「オーストラリア唯物論」の単なる紹介に終始するものではなく、同時にまた申請者独自の創見を少なからず含んでいる点である。とりわけ圧巻は、近年のジャクソンが説く「表象主義」について論じる際に、申請者がD.ルイスの「様相実在論」の巧みな援用を以て、こうしたジャクソンの所説に対して論理的に妥当な定式化を初めて与えることに成功していることである（本論文「第八節」を参照）。国の内外を問わず、一般に従来の分析哲学においては「心の哲学」と「分析形而上学」は相互に没交渉のままであったと言っても過言ではない。このような研究状況にあって、今し方述べたような仕方で両者の架橋を敢行し、これにより実り豊かな成果を挙げた本論文の試みは蓋し卓見であり、余人の追随を許さぬものがある。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと判定される。また平成二十二年一月二十日、論文内容とそれに関連する事項に関して口頭試問を行った結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降